

河後森城天守のモデリングにあたって

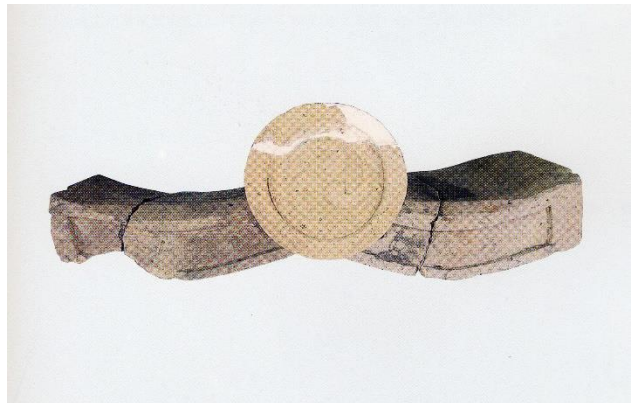
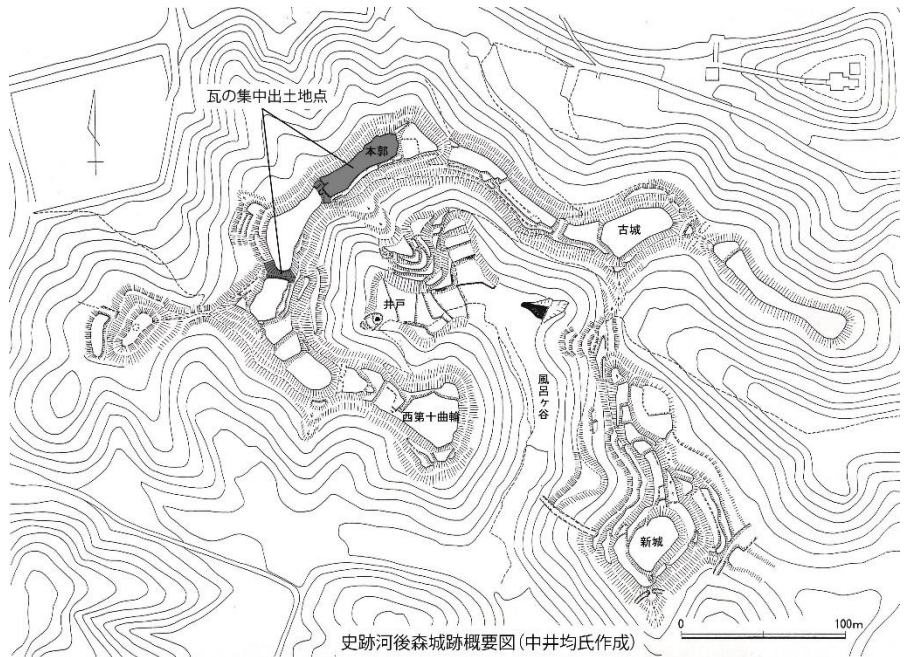
1 はじめに一河後森城に天守は存在したのか？

松野町に所在する国指定史跡「河後森城跡」は、予土（よど）国境にあつて、中世後期から近世初頭にかけて長期間機能した山城です。もともと河後森城は、中世の段階に築城されたことから、発掘調査等を通じて検出されるのは15世紀から16世紀にかけての遺構や遺物が中心となっています。

しかしながら、特に最高所であたる「本郭（ほんかく）」周囲では、近世初頭頃（1600年前後）の城の改修痕跡も明らかになりました。秀吉による四国平定を契機として、その家臣であった戸田勝隆、藤堂高虎といった武将たちが本地域を直接治めることになったためです。こうして、中世という群雄割拠の時代から天下統一に向けての時代、河後森城にも新しい形の城づくりが採用されていきました。

河後森城跡における中世から近世への具体的な変化は、遺構と遺物の両面から認められます。遺構における変化は、石垣の採用に表れており、特に本郭の出入り口付近では、中世の段階に使用されていた堀切（ほりきり）を改変する形で築かれたことがわかっています。また、遺物でもかなり大型の瓦が多量に出土しており、中には鱗（うろこ）や鱗（ひれ）をもった鯰瓦（しゃちがわら）が含まれていました。

つまり、少なくとも「本郭」の周囲には石垣が築かれ、その中に瓦葺きの建物、しかも鯰瓦がのるような大型で格式の高い建物が存在したと推測できます。実際、宇和島藩の古い記録の中に、慶長9年（1604年）に河後森城の天守を板島城（現在の宇和島城）に移築し月見櫓となったとする伝承が存在することから、この痕跡こそ今は無き河後森城の幻の天守を示しているのではないかと考えられるのです。



【写真】河後森城の本郭で検出した石垣（左）と瓦（上）

2 天守をめぐる二つの説

河後森城の幻の天守については、実はこれまでも主に建築学の立場から所在の想定が行われてきました。昭和 18 年（1933 年）、城戸久氏は「伊予宇和島城天守寛文再築とその創築天守に就て」において、現在の宇和島城天守が寛文期に再築された際、旧天守（宇和島城の創建天守）が「根次柱」をすでに多用している等、修理が困難なほど甚だしい腐朽状態であったことから、先の伝承を受けて、河後森城天守がまずは宇和島城の創建天守として移築され、その後この天守を月見櫓に改造したのではないかと推定しました。

一方、三浦正幸氏は、復元想定されている宇和島城の創建天守の本体が 6 間四方（約 12m 四方）であり、これを現在の河後森城の本郭に再現しようとしても建てるのが困難であることから、河後森城の天守は宇和島城の天守への移築を経ずに直接月見櫓に移築された可能性が高いのではないかと推測しています。

3 天守モデリングの実践

今回の河後森城天守の作図（復元：中村泰朗）は、三浦正幸氏の見解に基づき、移築先の宇和島城月見櫓を参考に行っています。月見櫓は、宇和島藩主の御殿が設けられた三之丸にあって、表門に面して建っていた象徴的な櫓となります。大きさも 5 間×4 間ほどの 2 階建てと、城内の櫓の中では最も大きく、宇和島城内では天守に次ぐナンバー 2 の建物であったようです。

また、残された絵図の分析によると、月見櫓は宇和島城内の他の櫓と異なって、移築によったため不規則で複雑な構造となっていることが指摘されています。切り縮められたと考えられる部分をもとに戻し、細部を当時の建築様式に照らし合わせ、河後森城の本郭に建築可能な規模を考慮すると、今回のような天守が復元できるということになります。

復元天守は、平面が 5 間×4 間、二重二階の構造で、屋根の向きを 1 階と 2 階で直交させる望楼型と呼ばれるタイプです。礎石を置いて建ち上がり、屋根には瓦が葺かれ（鯪瓦は形状が不明なため省略）、壁面は下見板張りが行われていたと推定されています。なお、通常天守は石垣を積んだ天守台の上に築かれますが、河後森城の発掘調査では天守台が見つかっていないため、この復元天守は地山となる岩盤の上に直接建っていたと考えられるようです。この岩盤に直接天守を築く行為は、天守を移築したとされる藤堂高虎が宇和島城や今治城でも用いた手法であり、河後森城天守の移築のみならず創建にも藤堂高虎が関わっていた可能性があります。

復元天守の画像は、お手元の端末を使って上下、左右と自由に動かすことが可能です。河後森城本郭に当時存在したであろう幻の天守の姿をいろいろな角度からぜひご覧ください。

【参考資料】

小野武夫 1970『日本農民史料聚粹』第 11 巻

城戸久 1933「伊予宇和島城天守寛文再築とその創築天守に就て」『建築学会論文集』28 号

三浦正幸 2012「河後森城の幻の天守を復元する」『平成 24 年度森の国戦国史講座』資料